

二〇二三年度 早稲田大学大学院教育学研究科
博士後期課程 一般・外国学生入学試験問題 「資料解説」
【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

解答上の注意

一. 教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）の入学試験問題は、出願時に届け出た指導教員の欄に従い、左記の表の解答すべき問題を解答しなさい。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	解答すべき問題・ページ	必要な 解答用紙 枚数
国語科内容学研究指導	松本 直樹	一 古典文学 I 上代文学（P. 2）	一枚
国語科内容学研究指導	新美 哲彦	二 古典文学 II 中古文学（P. 3）	一枚
国語科内容学研究指導	福家 俊幸	三 中国古典文学（P. 4～5）	一枚
国語科内容学研究指導	内山 精也	四 近代文学（P. 6～7）	一枚
国語科内容学研究指導	石原 千秋		
国語科内容学研究指導	金井 景子		
国語科内容学研究指導	五味 淵 典嗣		
国語科内容学研究指導	和田 敦彦		

二. 解答用紙の所定欄に受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。

三. 解答の際には、問題番号、設問番号を記入してから解答すること。（例「問題一―問二」等）

四. 解答すべき問題以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

五. 問題用紙は「七枚」（本ページ含む）です。

以上

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解説 (国語科教育学・国語科内容学)

古典文学Ⅰ (上代文学)

〔問題〕 後の〈資料A・B〉は、ともに三條西家本『播磨国風土記』の影印である。これについて次の問一～問三に答えなさい。問いごとに番号を明示した上で解答すること。

- 問一、〈資料A・B〉の全文を意味の通る漢字仮名交じりの書き下し文にしなさい (適宜句読点を施すこと)。その際、時代や文体を考慮し、また誤字・脱字・衍字等が認められる場合には適切な形に改めること。
- 問二、傍線部①の登場人物について、他の上代文学作品と比較して論述しなさい。
- 問三、傍線部②・③の登場人物の関係性について考えを述べなさい。

〈資料A〉

① 立天日槍今從韓國度來到於宇頭川底而乞宿於
葦原志舉乎今日改爲國主欲得吾所宿之處志舉
即許海中余時客神以劍攪海水而宿之主神即畏客
神之威行而先欲占國巡上到於粒止不宿之於此自以落
粒故号粒立

粒立 所以号粒

〈資料B〉

① 波加村占國之時天日槍
② 所以号粒者葦原志許乎今与天日槍今到故里立
志尔當各以里葛三條署足授之尔時葦原志許乎今之
里一條落但馬氣多郡一條落夜失郡一條此村故曰三條天
日槍今之里葛皆落於但馬國故与但馬何都志地而在之

※Web掲載に際し、左のとおり出典を追記しております。

天理大学附属天理図書館本複製第10679号／
『古典史籍集』(八木書店、1972年)より複製

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解説 (国語科教育学・国語科内容学)

古典文学Ⅱ (中古文文学)

二

問一 次の影印を行数・字配りなどそのままに翻刻せよ。

問二 本文校訂について、研究者はどのような態度で臨むべきか、ご自身の研究領域に関わらせながら論述せよ。

問三 次の中から一つを選び論述せよ。選択した番号を明記すること。

- ① 平安時代仮名日記の発生と展開について
- ② 平安時代後期物語の特質について
- ③ 『源氏物語』の同時代享受について

たれふらふやもにあらうぞ
このいふくはそふにさへ
やちちのふらふやもにあらうぞ
さへふらふやもにあらうぞ
はつそふにあらうぞ
うやむふらふやもにあらうぞ
ふらふ佛住ふらふやもにあらうぞ
ふらふふらふやもにあらうぞ
あふふふらふやもにあらうぞ
ふらふふらふやもにあらうぞ
ふらふふらふやもにあらうぞ
ふらふふらふやもにあらうぞ

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

三

中国古典文学

次の文は『四庫全書総目提要』の『元氏長慶集』の提要である。この文を読み、後の設問に答えなさい。

唐元稹撰。稹事蹟具唐書本傳。考稹與白居易書、稱河東李明府景儉、在江陵時、癖好僕詩章、僕因撰成卷軸。其中有旨意可觀、而詞近古往者、爲古諷。意亦可觀、而流在樂府者爲樂諷^A。詞雖近古、而止於吟寫性情者、爲古體。詞實樂流、而止於模象物色者、爲新題樂府。聲勢沿順、屬對穩切者、爲律詩、仍以五七言爲兩體。其中有稍存寄興、與諷爲流者、爲律諷。又稱有悼亡詩數十首、豔詩百餘首。自十六時至元和七年、有詩八百餘首、成二十卷。又稱昨巴南道中有詩五十首。又書中得七年以後所爲向二百篇。然則稹三十七歲之時、已有詩千餘首。唐書本傳、稱稹卒時年五十三。其後十六年中、又不知所作凡幾矣。白居易作稹墓誌、稱著文一百卷、題曰元氏長慶集。唐書藝文志、又載有小集十卷。然原本已闕佚不傳。此本爲宋宣和甲辰建安劉麟所傳、明松江馬元調重刊。自一卷至八卷、前半爲古詩八卷、後半至九卷爲傷悼詩、十卷至二十二卷爲律詩、二十三卷爲古樂府、二十四卷至二十六卷爲新樂府、二十七卷爲賦、二十八卷爲策、二十九卷至三十一卷爲書、三十二卷至三十九卷爲表狀、四十卷至五十卷爲制誥、五十一卷爲序記、五十二卷至五十八卷爲碑誌、五十九卷至六十卷爲告祭文。其卷帙與舊說不符、^C卽標目亦與自敘迥異、不知爲何人所重編。前有麟序、稱稹文雖盛傳一時、厥後浸以不顯、惟嗜書者時時傳錄、某先人嘗手自鈔寫、謹募工刻行云云。則麟及其父、均未嘗有所增損。蓋在北宋卽僅有此殘本爾。

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

〔設問一〕 傍線A「樂諷」とはどのような詩を指すのか、本文を踏まえつつ分かりやすく説明せよ。

〔設問二〕 傍線B「有悼亡詩數十首」は、元稹の別集所収の原文では「不幸少有伉儷之悲、撫存在感往、成數十首、取潘子悼亡爲題」と説明されている。

①原文(「不幸……爲題」)を通釈せよ。

②原文の「潘子悼亡」について、「潘子」が誰であることを明らかにし、「悼亡」とは如何なる内容の詩であることを説明せよ。

〔設問三〕 傍線C「即標目……重編」を、

①書き下し文に改めよ。

②元稹の自編本と四庫全書著録本の「標目」にどのような相違があるのかについて、具体例を一、二挙げつつ簡潔に説明せよ。

〔設問四〕 この提要の著者は、(甲)四庫全書著録本と(乙)劉麟・馬元調本、(丙)元稹の書に説く自編本、の三者の関係をどのように認識しているのであろうか。「甲本」「乙本」「丙本」という語を用いて、分かりやすく説明せよ。

〔設問五〕 元稹の、詩文以外の文学史的功績について、知るところを述べよ。

以上

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

四

近代文学 (石原・金井・五味渕・和田)

一、以下の文章は、夏目漱石『明暗』(大正五年＝一九一六年)の第二章の全文です。これを読んで以下の問いに答えなさい。

- ①最後の「彼」(津田)の結婚に関する思いを参照して、この男性はどのような人物と考えられるかを論じなさい。
- ②自分のしたことの原因を「偶然」と考えることは、近代的自我を中心に理解されてきたある時期までの近代文学の人間像にどのような影響をもたらすかを論じなさい。

電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた。身動きのならない程客の込み合う中で、彼は釣革にぶら下りながら只自分の事ばかり考えた。去年の疼痛がありありと記憶の舞台に上った。白いベッドの上に横えられた無残な自分の姿が明かに見えた。鎖を切つて逃げる事が出来ない時に犬の出すような自分の唸り声が判然聴えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に触れ合う音と、最後に突然両方の肺臓から一度に空気を搾り出すような恐ろしい力の圧迫と、圧された空気が圧されながらに収縮する事が出来ないために起るとしか思われない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲った。

彼は不愉快になった。急に気を換えて自分の周囲を眺めた。周囲のものは彼の存在にすら気が付かずにみんな澄ましていた。彼は又考えつづけた。

「どうしてあんな苦しい目に会ったんだらう」

荒川堤へ花見に行った帰り途から何等の予告なしに突発した当時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であった。その原因はあらゆる想像の外にあった。不思議というよりも寧ろ恐ろしかった。

「この肉体はいつ何時どんな変に会わないとも限らない。それどころか、今現にどんな変がこの肉体のうちに起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐ろしい事だ」

此所まで動いて来た彼の頭はそこで留まる事が出来なかった。どつと後から突き落すような勢で、彼を前の方に押し遣った。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。そうしてその変る所を己は見ただ」

彼は思わず唇を固く結んで、恰も自尊心を傷けられた人のような眼を彼の周囲に向けてた。けれども彼の心のうちに何事が起りつつあるかをまるで知らない車中の乗客は、彼の眼遣に対して少しの注意も払わなかった。

彼の頭は彼の乗っている電車のように、自分自身の軌道の上を走って前へ進むだけであつた。彼は二三日前ある友達から聞いたポアンカレの話を思い出した。彼の為に

「偶然」の意味を説明して呉れたその友達は彼に向つてこう云つた。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だという、所謂偶然の出来事というのは、ポアンカレの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見当が付かない時に云うのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の配合が必要で、その必要な配合が出来得るためには、又どんな条件が必要であつたかと考えて見ると、殆んど想像が付かないだらう」

彼は友達の言葉を、単に与えられた新しい知識の断片として聞き流す訳に行かなかつた。彼はそれをびたりと自分の身の上に当て嵌めて考えた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするよう思えた。しかも彼はついぞ今まで自分の行動に就いて他から牽制を受けた覚えがなかつた。為る事はみんな自分の力で行う事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた。

「どうしてあの女は彼所へ嫁に行ったのだらう。それは自分で行こうと思つたから行つたに違ない。然しどうしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。そうしてこの己は又どうしてあの女と結婚したのだらう。それも己が貰おうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗てあの女を貰おうとは思つていなかったのに。偶然？ポアンカレの所謂複雑の極致？何だか解らない」

彼は電車を降りて考えながら宅の方へ歩いて行つた。

博士後期課程 入学試験問題

科目名 資料解読 (国語科教育学・国語科内容学)

二 次の文章は、中村光夫『明治・大正・昭和』(新潮社、一九七二年)の一節である。文章を読んで、次の問いに答えなさい。

(1) 傍線部「そこに文壇というものが成り立っていて、いわば文学の生産批評の機関としての役割を果たしてしました」とあるが、具体的にはどのようなことか、説明しなさい。

(2) 任意の近代文学作品を一つ取りあげ、その作品について、ここで述べられていることと関わらせて論じなさい。

こういう言い方は、ちよつと誤解を招きそうですけれども、ごく簡単にいうと、大正時代の作家は、非常に狭い範囲の読者を相手にして仕事をした。しかし、その読者と作者の間の精神の交流というか、あるいはつき合いというか、そういうものは現代では考えられないぐらい緊密で、力強いものがありまして、それだけじゃなくて、作者同士の間にも文壇というものがはつきり存在して、文壇は一般社会とはべつな道徳で支配されている。べつな理想、べつな価値観をもっている。つまり一般社会では金を持つていれば尊敬されるけれども、文壇ではそうばかりはいかないとか、そういうことですね。つまり俗人と違った、ほんとうの意味でのエリートの世界という自負を文壇人自身ももっていた。

一方からいいますと、大正の文壇は非常に狭い、貧しい人々の集りであつたけれども、その誇りは非常に高く、文壇の人たちの考えが日本の社会をとりこえて、世界の一流の人たちに結びついて、彼らの芸術品を、いろんな意味で自分のものとして消化していました。

こういう特殊な人たちの集りである文壇がはつきりありまして、その文壇を背景として生れた文学が私小説だ、こういうふうについてよいかと思うのであります。

こういうことを言いますのは、現在の日本に文壇があるかどうかということを考えてみた上でのことです。それはあるという説も、ないという説もありますが、そのぐらい現在では文壇というものは、なんとなく希薄な存在になつてしましました。それと同時に文学の読者の数は大正時代の十倍、あるいは数十倍にふくれあがりましたが、読者に対する影響力というものは、かえつて少なくなつてゐるんじゃないかと思われまふ。(中略)

ここが大正時代と現在と、非常に違うところで、現在の文壇では、お互いの私生活に、だれも干渉しないし、問題にすることも刑法にでもふれない限り、ないわけでありますが、しかし大正期の場合にはそうではなかつたのです。ある作家が恋愛事件をおこしたりしますと、そのことが、社会的な話題にもなるけれども、文壇の中で、その人の作品と結びつけられて論じられました。そして、世間の道徳の標準でなくて、文壇独特の標準でもつて論じられる。たとえばやり方がきれいだとかきたないとか、卑怯だとか、勇気があるとか、そういう考え方で、世間体その他のことを離れて判断される、そういうことが文壇から否定的に評価されれば、その人の作品自体も否定されるような傾向にむかつたりします。

そういうふうにお互いに見張りをし合つて、そして、よくいえば、お互いに切磋琢磨し合う、お互いに触れ合つて、磨き合つて、あるいは嫉妬から足を引っ張る、というようなこともありましたでしょうけど、とにかくお互いに生活と作品をはつきり結びつけて、ある理想に従つた道徳的な生き方を、たとえ社会から見ても反道徳であつても、そういう生き方をしようとして、努力する。そして、一般社会の人々も、自分たちにいろんな事情があつてできないけれども、あややるのが実際は本当じゃないか、というような気持ちでそれを見守っていました。その見守つていた背景には、彼らの主張が、世界のいちばん新しい考え、あるいはいちばんすぐれた芸術、そういうものを生み出した芸術家と、頭の中だけであるけれど、文学の場合は、ときによると翻訳を通じてであり、絵画の場合は、複製を通じてであるけれども、そういったものから本当の影響を受けて、自分らが、たとえばセザンヌとともに、ゴッホとともに生きてゐると、誇張なくいえるような生き方をしていました。

そこに文壇というものが成り立っていて、いわば文学の生産批評の機関としての役割を果たしていました。そして私小説は、この文壇を背景にして成り立っていました。ですから時代の文学思潮から見ても、あるいは文学者の実際の生活に照らしてみても、それに非常に適していた文学形式であつたというふうにいえます。

さらにいえば、小説の読者が非常に数が少ないということも私小説に非常に有利に働いていました。当時の書物は、たとえば永井荷風のような一流の作家であつても、作品の初版は千部が普通だったと申します。いまの本の売れる作家に比べますと十分の一下、その千部が全部売れるわけでもないし、たとえば五版を重ねたにしても五千人でありますから、非常に数が少ない。しかし少ない代りに、読者の一人一人が、みんなエリートである、選ばれた人間で、俗人にわからない文学を読んでいるんだ、というような自負をもつていて、それであるから、作者も、そういう俗人になん、ほんとの生き方というものをしてほしい。自分も、ほんとに拍手喝采して、それどころか、ときによればうちの財産を売つても支持して、あとについていくんだ、というような気持ちで読んでました。ですから数は千であり、五千であつても、精神的権威といえますが、影響力の深さは、非常に深かつたわけです。

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

受験番号	
氏 名	

氏 名	
-----	--

科目名 資料解読
【教科教育学専攻】

【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

大学記入欄

問題番号

裏面に続く
←

← 裏面を使用する場合ここから記入すること

←

↑ 111#61

↑